

諫早神社甕製鳥居

新会員 小澤 祐二

神社について

神社本庁の工巧には「鳥居」の解説として、「鳥居は神社を表示し、また神社の神聖さを象徴する建造物ともいえます。鳥居は神社の内と外を分ける境に立てられ、鳥居の内は神様がお鎮まりになる御神域として尊ばれます。また、特定の神殿（本殿）を持たず、山など自然物を御神体、または依代としてお祀りしている神社の中には、その前に鳥居が立てられ、神様の御存在を現すものとして重視されています。

鳥居の起源については、天照大御神が天の岩屋にお隠れになった際に、八百万の神々が鶏を鳴せましたが、このとき鶏が止まった木を鳥居の起源であるとする説や、外国からの渡来説などがあります。」とあります。

諫早神社

諫早神社は、明治時代以前は「四面宮」として「平城京・奈良時代の神亀五年（西暦728年）に、聖武天皇の勅願により行基菩薩が当地へ赴いて石祠を祀ったのが始まりと伝わる。」と、諫早神社工巧に記載があります。明治に発布された神仏分離令により四面宮横の神宮寺であった莊嚴寺は廃寺にされ、名称も「神社」を使用する様になりました。各地の四面宮は温泉（うんぜん）神社と改称しますが、諫早の四面宮は「諫早神社」と改称しています。明治初期に諫早の神社について纏められた「第四大区神社明細調帳」には名称が「諫早神社」となっており、諫早を代表する神社として早々に名称変更したようです。（此の頃は、まだ神仏分離令が行き届いていない神社もあり、同帳には未だ「神社」となっていない社も存在する。また、諫早神社に関して、諫早史談第29号参照）

前説の「第四大区神社明細調帳」には、各神社の縄張りが見示されており、諫早神社は本明川から階段で上がり、鳥居が一基、太鼓橋、神門、参道があり両脇に手水鉢、灯籠一対の後ろに拝殿、神殿があるように描かれています。また、諫早神社の周囲は、現在は本明川側に玉垣が設置されており、昭和三十二年の諫早第水書前の写真でも現在の玉垣が見られますが、同帳では石垣の上に塗塀となっています。嘗ての莊嚴寺の場所には建物がありますが、社務所か小屋に見える建物が見られます。本明川を挟んで対岸に一基の鳥居、川中に一基の鳥居が昭和三十二年の大洪水まではありましたが、この鳥居の記載は無く、神社前の道路上に一基の鳥居があります。此の

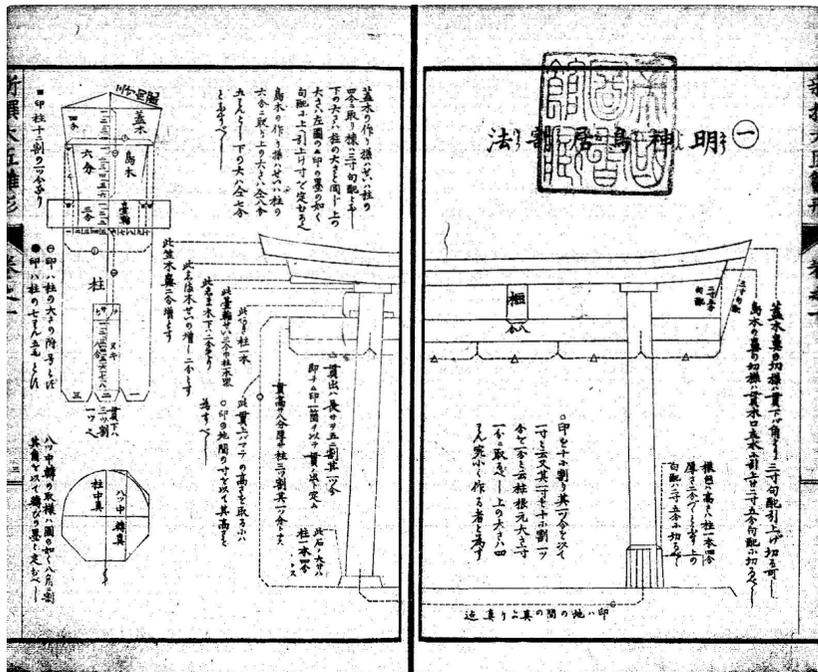
鳥居は水書前の写真では、ここには肥前鳥居が設置されており、此の形は佐賀に多く見られるタイプの肥前鳥居であり、雲仙市西郷の八幡神社にある肥前鳥居と同型愛宕山の肥前鳥居のタイプと異なる)の100年前後の江戸初期以前の建立と思われます。残念なことに当鳥居は諫早大水書で流出していません(本明川河原に鳥居残欠があり、どの鳥居のものか今後確認が必要です。また川中の二ノ鳥居の物と推定される扁額が諫早神社拝殿横に設置されています。)

鳥居の分類と歴史

鳥居については冒頭で述べましたが、由来がわからず鳥居の原型も不明なままです。古来より鳥居なるものが存在し江戸時代になると、木割法(設計図)として鳥居に関する分類や設計図が書籍化され、従来までは各地の石工集団の一子相伝で伝えられていたものが一般化されて形形状等も統一されていきます。冒頭に記載した肥前鳥居はこの木割法が一般化されるより前の石工集団内で一子相伝されていた時期に分類されるようです。分類は、古来より代表的な名前として、神明鳥居や明神鳥居等多岐に渡りますが、地方の鳥居については詳細の記録がなく、昭和十八年発行の根岸栄隆「鳥居の研究」や津村勇「鳥居考」等を待たなければいけません。その後、鳥居に関する研究がなされており、著書も散見されますが鳥居の由来や「鳥居」の名前、分類については、大きく発展していません。

諫早神社甕製鳥居

諫早神社には先に述べた肥前鳥居の他に、荘厳寺があった側から拝殿正面に向かってもう一基の小さな鳥居が大正八年に建立されました。此の鳥居は非常に珍しく、甕製の鳥居です。現在各

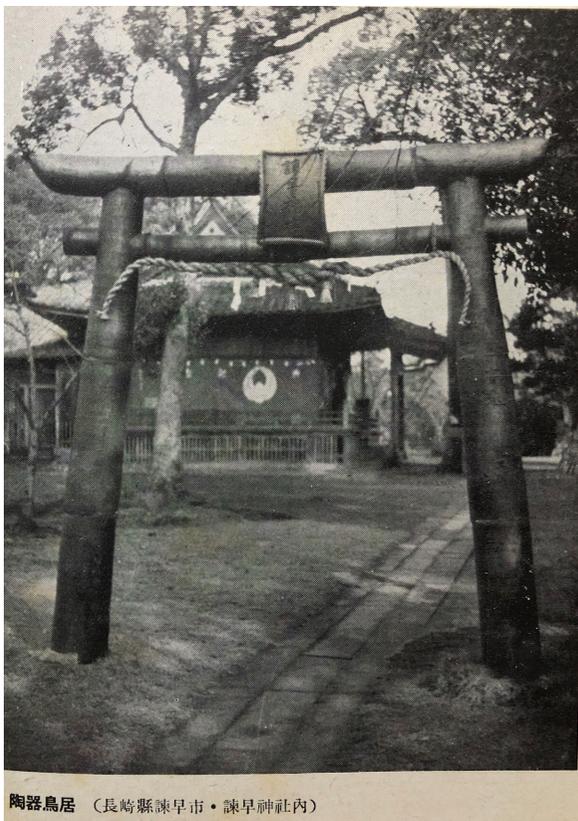


国立国会図書館蔵「新撰大匠雛形大全」より



本明川川原に放置された諫早神社鳥居柱 撮筆者撮影

地の神社に建立されている鳥居の材質としては、木製、石製(コンクリート含む)が主流です。その他銅製、鉄製(ステンレス製含む)、陶器製鳥居の有名なところでは、佐賀松原神社、陶山神社、長崎八幡町宮地獄神社(何れも白磁製)、滋賀信楽愛宕神社(陶器製)、岡山・倉敷由加神社(備前焼)があります。その中でも、異彩を放っているのが、諫早神社の陶製(甕製)鳥居です。昭和十八年発行の根岸栄隆著



陶器鳥居 (長崎縣諫早市・諫早神社内)

根岸栄隆「鳥居」より

「鳥居」に鮮明な写真が掲載されています。写真をみると鳥居の後ろに拝殿と神殿の一部が見え、拝殿の側面に幕がかかっており家紋が「上り藤」です。

これは江戸時代の諫早家の家紋で、諫早神社の宮本宮司に確認したところ諫早神社で間違いなしとのことでした。参道の横から石畳が続き、その途中にこの鳥居が建立されています。此の写真から鳥居が建立されていた場所を推定すると、拝殿横の社務所にテラスがありますが、その端がちょうどこの石畳の部分とのことで、社務所玄関のテラスの端あたりが建立場所のようです。



諫早神社保管の甕製鳥居扁額

この鳥居の扁額には「諫早神社」と彫られているのですが、この扁額は水害で流出を免れ、現在も神社で保管されています。この扁額の実寸より鳥居の寸法を計算すると、鳥居高さ約2.5m、貫までの高さ約2m、横約2.3mあります。また、柱は二箇所継ぎ目が見られます。

甕山焼

「甕」といえば、江戸時代、諫早は西郷にあった石坂山慈眼院(西郷の板碑がある箇所)付近に甕山焼が開窯しています。それ以前は中島浩気著「肥前陶磁史考」によれば、戦国時代西郷氏の時代に開窯していますが、その後一時衰退、諫早史談29号諫早日記天保五年(1834)十二月二十三日の条では茶白山脇で「甕山仕立てに相成り、段々焼き立てに相成り候處(後略)」となっており、開窯中である旨の記載があります。同天保六年(1835)正月十五日の条には、「次第に甕類宜敷出

立ち候」となっていて、製品として十分なものになったことが書かれており、その後、諫早史談大50号諫早日記天保九年(1838)閏十一月十一日の条に、慈眼院付近で甕等を作っていて諫早領主が立ち寄ったことが書かれています。しかし、これも次第に衰退し、明治三十年頃、前代議士の木下吉之丞主宰により諫早甕土管製造株式会社が設立され、甕製の土管が作られます。その二、三年後、株主の一人だった内田伊左衛門が会社を引き受け、個人経営となって土管、甕、鉢、瓦等を製造しています(中島浩気著「肥前陶磁史考」より要約)。因みに旧長崎刑務所の煉瓦も此処で焼かれたとなっており、また諫早市が此処に甕製の土管を発注した記録も残っているようです。この茶臼山山頂には内田伊左衛門が大正十三年に作成し奉納した香炉が残っています。また、西郷神を奉納した扁額も残されています。

鳥居寄進と建築

さて、話を鳥居に戻しまして、この鳥居の柱には他の鳥居の柱と同様、寄進者名が掘られています。津村勇著「鳥居考」に「大正八年三月当村内崎伊左衛門寄進 細工人品川利夫」とあります。また、根岸栄隆著「鳥居」には「大正八年建造。山口県の牟礼で焼いたもの」となっています。どちらも、元資料が書いてありませんので、根拠を見つけることができませんが、山口県牟礼でも明治中頃から昭和五十年頃まで甕製土管を製造している末田焼があります。ただ、「鳥居考」には「当村」と記載あること、末田焼と諫早に繋がりを見出せないことにより、寄進したのは、「諫早村」の「内崎伊左衛門」であって近場の茶臼山に発注した可能性があまりありません。諫早村は大正十二年より諫早町となっており、鳥居を寄進した大正八年時点では諫早村のままです。しかも、大正十三年に内田伊左衛門銘の香炉や甕製の鳥居扁額が前述のように茶臼山に残されています。以上のことより、当鳥居は、「大正八年」、「諫早村内田伊左衛門(内崎伊左衛門は間違い)」寄進の甕製鳥居の可能性が高いと思われます(因みに細工人品川利夫は不明)。

建築工法に関しては甕製土管の工法を利用したと考えられますが、土管を継いだとしても柱は倒壊してしまいます。しかし、佐賀の陶山神社が陶器製鳥居(明治十一年寄進有田焼)を改修した際に「鳥居の両脇を支える2本の柱。割れ口の随所に白から灰色のドロドロの噴出物があり、磁器質の柱の中はモルタルかコンクリートでも詰めて強度を図っているものと考えていた。ところが、何と中身は赤土を突き固めたもの。(後略)(佐賀新聞ニュース2020年4月20日記事より抜粋)」となっており、甕製鳥居も同様であった可能性が高いと考えます。ただ、部品を繋いだのは果たして甕製土管の工法と同じように漆喰での接合(江戸期はモルタルがないので漆喰を使用していた。)なのかモルタルでの防水なのか、今後の調査が必要かと考えます。また今回、状況証拠により諫早茶臼山での焼成と建立であると推論を立ていますが、この焼成場所を確定するために今後継続しての調査が必要です。

歴史に「もしも」は無いのですが、この諫早大水害がなければ諫早神社の二つの重要な鳥居(第三の鳥居である肥前鳥居と脇鳥居である甕製鳥居)は、諫早市の文化財となっていたかもしれませぬ。肥前鳥居についてはまた別途報告しますが、この甕製鳥居は全国でただ一基しか無く、珍しい物です。亡くなってしまったものに対しては非常に残念ですが、読者の皆様にその珍しい鳥居が諫早にあったことを記憶に留めていただければと思います。